

横浜という地名

神奈川県は地理（特に地形）を教える教員には、教材の宝庫だと言われています。面積は小さいですが、山も川も平野も海岸もあり、教科書で扱う地形の例としてわかりやすい場所がたくさんあります。これまでも箱根火山や丹沢山地、酒匂川の扇状地や自然堤防などを扱いました。他にも相模川沿いの河岸段丘、三浦半島や真鶴半島の岩石海岸、湘南海岸などの砂浜海岸、平塚や茅ヶ崎の砂丘、砂州と陸繋島の江の島、カルデラ湖の芦ノ湖などがあります。

今回は地元を離れて、県庁所在地である横浜について書きたいと思います。横浜という地名の起こりは、現在の県庁などがある中区の付近に江戸時代からあった「横浜村」に由来します。どんなふうに浜が横になっていたのでしょうか。下の図をみてください。

これは砂州という地形で、沿岸の海流の影響で砂浜が細長くのびたものです。日本三景の一つである京都府の「天橋立」や北海道のサロマ湖などが有名です。現在横浜市の中心となっている伊勢佐木町や関内駅の周辺には、入江のように海が入り込んでいました。この入江を専門用語でラグーンと言います。

砂州の上には、漁業や農業でくらす 100 戸に満たない集落がありましたが、1858 年の日米修好通商条約で開港することになった神奈川（現在の京浜急行線神奈川駅・仲木戸駅付近）が東海道に近すぎるという理由で、急遽横浜村付近に港をつくることになり、横浜村の住民は砂州のつけ根付近の場所に移住させられました。もともとの横浜村の住民の居住地ということで、「元町」とその場所は名付けられました。現在はおしゃれなショッピングストリートとして知られていますね。

その後入江は徐々に埋め立てられ、現在の税関にあたる運上所がつくられ、周辺に外国商人のお店などが立ち並ぶようになります。この外国人居留地は一般人が自由に往来できないように、水路で囲まれ、要所に入出りを監視する関所がありました。「関内」にはそんな地名の由来があるのです。

ちなみに、現在横浜スタジアムがある横浜公園の場所は、江戸時代末期には、外国人を相手にする遊郭街がありました。ところが火事で燃えてしまったのです。遊郭街の周囲にも水路が掘られていたため、そこで働いていた女性をはじめたくさんの人が、逃げられずに亡くなりました。仕事帰りに夜遅く横浜公園を歩いていると、何となくゾクゾクするような感じがしたのは、そのせいかもしれません。



横浜開港資料館 館報「開港のひろば」138号
(2017年)より